

家は家庭愛和の道場

上うえ廣ひろ榮えい治じ

皆さんは、今お住まいの家に満足していますか。改善したいところはありませんか。

特に意識していたわけではないのですが、日曜日の夜になると、何気なく見ているテレビ番組があることに気づきました。「ビフォーアフター」という番組です。人気番組のようですから、ご覧になった方も多いでしょう。

番組では、まず、「大変だなあ」としか言いようがない不便な家が登場します。風呂やトイレがなぜか屋外にあったり、階段が急勾配で危険極まりなかったり、居間に家具があふれていて、食事さえ家族一緒にとることができなかつたり、そんな問題だらけの家に住む家族が紹介されます。

そんな厳しい「苦難」を「福門」に変えようと登場する救世主が、「匠たくみ」と称されるリフォームの達人です。匠は、あえて建て替えてはならない方法で、さまざまなアイデアとノウハウを駆使しながら、家族の希望をかなえていきます。徹底的な大改造とはいえ、あくまで家の土台や柱を残したリフォームという限定のなかで、「より善く」改造していくというところに、この番組を成功させている仕掛けがあるように思われま

す。つまり、今の生活を「否定し、リセットする」のではなく、「より善く改善（リフォーム）する」というところが、視聴者の共感を呼ぶのでしよう。

もちろん、新築ではなく、リフォームにこだわっているのは、テレビ局のプロデューサーだけではないでしょう。築後五十年を経過して、土台や柱まで腐ってしまった家など、建て替えるか、引越してしまっただけが早いにもまっています。それなのに、あえてリフォームを選択したのは、ほかならぬ依頼者である家族なのです。おそらく、ここに登場する家族は、これまでの自分たち家族の歴史や思い出を大切にしているのでしよう。今あることを肯定し、そのうえで「生活をより善く改善していく」ことを望んだに違いないのです。けつして広くはないけれど、家族で大切な時間を過ごしてきた居間。ときには夫婦で言い争いもした寝室。さりげなく子どもたちの成長を見守ってくれた隣近所の人々。そんな人生の「コマ」コマが染みついている家を、簡単に見捨てることはできなかったのです。

電器メーカーから住宅産業にまで事業を広げた松下幸之助さんは、次のような意味の一文を残しています。——孟子に「居は氣を移す」という言葉があります。住まいはそこに住む人の心を変化させ、一つの性格を形づくる力を持っている、ということですから日々の生活を通じて、物事を学び、感化を受けていきます。その生活環境の中心をなすものが住まいであり、その意味で、住まいは人間形成に大きな影響を与えるものだといえるでしょう。それゆえ私は、住まいを単に雨露がしのげる場所、心身の置き所としてではなく、人間を鍛える道場、人格の成長をはかる場所として重視しています。ですから、細心の注意をもって、住まいづくりを心がけねばならないと思っています——（「住まいは人間形成の道場」）

家は単なる雨露をしのぐ器ではなく、家族の生活と一体となり、善きにつけ悪しきにつけ、そのありようを人に移してしまう大切な存在であるということです。いかにも、人間のあり方に深い思いを寄せていた松下

さんらしい言葉です。

これを実践倫理ふうに言えば、「住まいは家庭愛和の道場」ということになるでしょう。我が会が掃除を「みそぎ」と呼んで、最も身近な実践として重視するのも、その同じ思いからです。

家を単なる「物」ではないと考えるのは、松下さんや我が会だけではありません。家を持つのは、誰にとっても大変なことです。場所選び、資金の調達、ローンの重さに気が滅入ることもあるでしょう。そんな山積する問題を持ち越えてでも家を持つとするのは、家は住むためのインフラであるという以上に、自分たち家族の仕合わせの大切な基盤であるということ、誰もが直感しているからに違いありません。

では、幸いにしてマイホームを持ってた家族は、仕合わせに暮らせているのでしょうか。

現実には、毎日、家族がそろってリビングのテーブルを囲むことさえ、なかなか難しい時代になっています。「孤食」化の問題も、言われて久しくなります。ある家電メーカーの調査によると、家族全員がそろって団欒する回数は、平均で週に二・六回しかないといえます。しかも減少傾向が続いているというのです。その原因は容易にいくつも思い浮かびます。たとえば携帯メールやコンピューター・ゲームの流行、塾通い、パートの仕事、会社の残業などなど。その一つ一つはたしかに悩ましい問題です。簡単に解決できるという問題ではないでしょう。

しかし、たとえそうだとしても、家族にとって家は、どんなに遅くなっても必ず帰ってくる場所であり、帰れば家族が待っていてくれる場所なのです。そこには家族の団欒があり、一日の疲れを癒してくれる場所、仕合わせを実感させてくれる場所でもあります。現実はなかなかそうではないけれど、できることなら、家をそんな場所にしたいと、誰もが願っているに違いありません。

だからこそ、このテレビ番組の最後に、リフォームされた新しい家に家族が帰って来て、歓声を上げる姿

に、視聴者までもがうれしくなるのです。家族の仕合わせな明日が伝わってくるのです。

視聴者にとって楽しいのは、匠が繰り出す数々のアイディアです。匠が作っているものは何か。そのクイズに正解を出せるゲストはほとんどいません。それほど意外性のあるアイディアなのです。

しかも、ただ意外性があるというだけではありません。「家族が仕合わせになるように」という願いが込められているのです。この思いこそ、番組の中核をなすコンセプトであり、人気の秘密であるに違いありません。

それが番組の基本方針だとすると、登場する匠たちのプランに共通点が多いこともうなずけます。

たとえば、さまざまなデッドスペースを見つけては、そこに収納場所を作ります。家族全員が団欒できる広くて心地よいLDKを実現するためです。かつては豊かさの象徴だった子ども部屋も、できるかぎり開放的にして互いに気配を感じられるようにしたり、吹き抜けを利用して一階と二階とのコミュニケーションを可能にしたりします。同じ理由で対面式のキッチンも多用されています。また、家族がたどってきた歳月の証人として、改造前の家の一部を新しい家に取り込んだり、思い出の品々を斬新な感覚で飾ることも、番組の恒例となっています。もちろん、子どもの成長に合わせて間取りが変えられたり、介護される側とする側への行き届いた配慮があるなど、それぞれの家族に合わせた工夫もされます。

番組組を見ると、誰もが「家庭愛和」をせつなく求めていることが伝わってきます。そして、それは言うまでもなく、我が会の実践の出発点であり、還ってくる場所でもあります。

さて、皆さんの家は「愛和の場」にふさわしくなっているでしょうか。心地よい団欒の場になっているでしょうか。「家庭愛和の道場」という観点から、ときには、自分の手でできる模様替えなど、考えてみてはいかがでしょうか。